

新たな創造に向けた看護研究

先端的試みをどう活かすか

21世紀を迎え、社会の情報化は急速に進んでいる。企画者が、本誌編集委員に就任して以来、10余年が経過し、その間に2つの企画を受け持った。その1つが本誌34巻4号(2001年)焦点「IT時代における看護研究の取り組み」である。この企画から10年が経とうとしているが、この間に日本は情報通信技術の画期的な発展を遂げてきた。その結果、社会は、まさしくユビキタス化が進み、いつでもどこでも、知りたい情報を得ることが可能な時代が始まっている。

このような社会システムの急速な変化に呼応し、未知の社会への準備を進める過程にあって、巷では情報化が浸透し、iPadの登場も大きな話題を呼んでいる。まさしく情報通信技術の革命が始まったのである。この流れのなかで、世界最先端の情報技術立国をめざす日本としては、その力を世界に示す意味においても、後れを取ってはならないであろう。特に2011(平成23)年の7月から本格開始されるテレビのデジタル化は、このような動きを加速させるものと予測できる。

本誌34巻4号で企画したタイトルでは、IT(information technology)という用語を使用した。最近ではICT(information and communications technology)という用語で一般化されている。この用語の使用方法の変化は重要で、これまでになかった新たなコミュニケーション手段が加わったことを意味し、これによって人間の社会生活は大きな変革期を迎えている。

企画者は、看護学と人間工学(建築人間工学)を専門としている。特に人間工学の分野では、これまでの定義を変えざるを得ない状況にある。その原因は今日の情報革命である。これまで人間工学は、機械文明が進むなかで、人間と機械とのつなぎ役として重要な役割を果たしてきた。つまり「人間・機械系(man-machine system)」あるいは「人間・もの系(man-environmental system)」として、有機体的システム論の上に立った学問の新規性をコンセプトと

してきた。しかし今日の情報革命は、他の多くの実践科学分野の学問にも大きな影響を及ぼしている。その1つに「サイバニクス(Cybernetics)」(Cybernetics is a new horizon to explore the relationship among human, machine and information.)があげられる。サイバニクスとは、「人・機械・情報系」の融合・複合分野として、筑波大学大学院システム情報工学研究科の山海嘉之教授のもとに、日本における最先端研究開発プロジェクトの1つとして進められている。その具現化された成果は、ロボットスーツ HAL[®](Hybrid Assistive Limb[®])の実用化につながっている(<http://www.cyberdyne.jp/robot-suithal/index.html>)。このプロジェクトには、企画者も研究分担者として携わっている(<http://www.ccr.tsukuba.ac.jp/members/index.html>)。

今日の看護研究においては、複雑な研究対象に対して、これまでに気づくことがなかった新たな見方や考え方の発見に向けて、次代の社会に求められる新たな価値を見いだすような質的研究の成果が次々と得られはじめている。このような研究を推進することは、まさに看護学の発展にとって重要であることはいうまでもない。しかし一方で、看護学が、健康生活に役立つ実学であるならば、学問分野を超えた、最先端の科学・技術を積極的に応用し、近未来の看護実践技術を創造・開発し、見える形で研究成果を具現化する努力もまた重要ではないだろうか。今回の焦点では、看護学におけるこのような取り組みの一端を紹介したい。

(企画：川口孝泰 筑波大学大学院人間総合科学研究科教授)